

第73回兵庫県広報コンクール 審査講評

【広報紙部門】

審査員：細田 奈美子（神戸新聞社 編集局メディアセンター 紙面編集部第二部長）

今回、兵庫県内25市町もの広報誌（紙）を読み比べるという、貴重な機会を得ました。ひとくちに「広報誌（紙）」といつても、そのテーマやスタイルはさまざまで、そのバリエーションの豊かさに圧倒されました。「戦後80年」や「異文化共生」、「ひきこもり支援」、「消防団の維持」…など、全国的にニュースになっている話題を「わがまちのこと」として取り上げた自治体も多く、ニュース感覚の確かさ、フットワークの軽さを感じました。

今回の特集、市の部では、特選の小野市に加え、加東市、宝塚市などが印象に残りました。小野市は、外国人居住者との共生について取り上げました。SNSなどでは外国人排斥の発信などもあるなか、お互いに理解し合うことが大切だというメッセージが、まっすぐに伝わる内容でした。加東市、宝塚市は、「ろう者」「ひきこもり」という、いわゆる「少数弱者」に光を当て、ともに支え合う社会を呼びかけています。レイアウトもすっきりと工夫されていましたが、文章が少々長いこと、フォントの細さなどが難点として挙げられました。広報誌（紙）という、幅広い年齢層の方が読むメディアだからこそ、読みやすい字体、目にやさしい色づかいなどユニバーサルデザインに配慮していく必要があると感じました。

町の部では、佐用町の紙面にひかれました。「佐用の肉がおいしい7つの秘密」と題し、その歴史や生産者・流通業者・消費者の声をバランスよく取り上げました。なんといっても、お肉の写真がおいしそう。特集の最後に「佐用肉フェス」のイベント告知につながる流れも「ニクい」演出でした。

少子高齢化が進み、持続可能な地方自治体を目指して、さまざまな取り組みが行われています。都会からの移住支援も、そのひとつでしょう。ふとした場所で目にした広報誌（紙）が、移住のきっかけになることもあるかもしれません。「選ばれる自治体」の入り口として、広報誌（紙）が果たす役割は大きいのではないかと感じています。その意味でも、単なる「お知らせ」にとどまらず、それぞれの自治体の魅力を発信するメディアとして、今後とも頑張っていただきたいと思います。

審査員：吉田 三千代（広報・編集アドバイザー）

本年は、参院選ほかで「外国人との共生」を政治的にアジェンダ化する動きが活発な年であった。排他的なムーブを是とする声がネットを中心に広がったが、11月には全国知事会から「多文化共生の推進を」というメッセージが出されもした。応募作では唯一、小野市がこの話題に取り組んでいた。

共生社会のリアルを朗らかにレポートしたこの特集は、平易な語り口ととびきりの笑顔の数々に引き込まれた。小野市ならではのポジティブなアプローチで、取り上げる事柄を「どんどん好きにさせる」パワーはさすがだと思った。

本年はまた、戦後80年であり、昭和100年だった。応募作としては、3市がこれらを特集テーマに据えていた（戦後80年：洲本市・姫路市、昭和100年：芦屋市）。いずれも高い完成度の力作であり、少なからぬ市民が保存しておこうと思ったはずだ。

分けても強く印象に残ったのは、洲本市の作品だった。「これからを生きるあなたへ」と銘打ち、人の記憶、土地の記憶を追う。戦争というものにどう向き合うかー『広報すも』独自の静謐な声が問いかけていた。

自治体の広報誌は、一義的にはその時々の課題を可視化し、解決への参画を促すことが使命であろうと思う。しかし、大きな時代のうねりを長いスパン、高い視座でとらえた、「記憶」装置としての役割もまた重要だと、今回、改めて実感した。

スタンダードな広報誌の役割を明快に果たしているのが尼崎市だった。消防団の活動を伝える特集には元気なバイブルが溢れしており、色遣いも含め、高い水準でまとめられていた。コンパクトな誌面だからこそその潔さ、読みやすさが大きな魅力だ。

町部では、地元の肉を丹念にアピールした作用町が光った。10ページに渡る大作で、最後にイベントに誘う構成がライブ感があつて引き込まれた。

他の市町の応募作も、意欲や丁寧な取材、独自の切り口が光るもののが多数あった。それだけに、少しのデザインの傷が可読性を下げている作品に出会うと、残念でならなかつた。

「読む気にさせる」ことを念頭に制作に当たつていただければと切に願う。

審査員：有田 佳浩（兵庫県広報プロデューサー）

自治体の広報誌制作にはふたつの大きな要素があると考えています。「特集」と「全体の情報クオリティ」。今回、審査においてもこのふたつの視点で審査させていただきました。

まず「特集」について。

少しそもそも論になりますが、広報の目的は「住民といい関係作る」ことにあります。

広報誌も然り。決して役所が伝えたいことを伝えるためにあるメディアではないはずです。いわば、特集は対話の糸口なわけです。そう考えた時にテーマ（企画）はやはり重要です。発信側本意ではなく、住民と対話ができるテーマかどうか。対話のポイントは「自分ごと」にしてもらえる余地があるかどうかです。そして、その対話をどう作り上げるか。ここで必要になるのが「多様」です。簡単にいふと、立場が違う人がどれだけ登場しているか。今回、上位入賞の自治体は、特集におけるこの「自分ごと」と「多様」がやはり優れていたと思います。なかでも、規模が大きな自治体にあって、ここまで「自分ごと」を表現された尼崎市は、最も印象に残りました。大きな自治体ほど、「自分ごと」はホントに難しいですから。

次に「全体の情報クオリティ」。

これは特集以降の情報の見せ方。その内容よりも、どれだけ飽きさせずに最後のページまで見てもらえるか、です。ポイントは「変化」。大小のメリハリを含め、特定コーナーの存在感。もちろん、ストレスなくページをめくり続けられるような書式、フォントも重要です。この部分では、今回も含め、数年来、川西市と小野市がやはり抜けた存在のように思います。

このふたつの視点、特に特集の「自分ごと」と「多様」は、過去の全国コンクールの受賞作を見ても、重要なかと思います。賞をとることがすべてではないですが、広報誌を進化させていく中での目標（通過点）に据えるのもいいのではないかと思います。

(特選受賞作品)

○市の部：小野市 「広報おの「Ono Press」 10月号」

外国人居住者との共生や違いを認め合う大切さなど、問題をしっかりとらえている。QRコードに英語表記をついたのも、配慮が行き届いていると感じた。レイアウトが的確で、ビジュアルとテキストのバランスが良い。肯定的に共生に取り組む市の姿勢が、広報誌を通して浸透し、マイナス感情や無関心を払拭する推進力になると良い。

○町の部：佐用町 「広報さよう 12月号」

しっかりとページを割いた多様な視点の特集は読み応えがある。生産者をじっくり紹介し、わが町の肉の魅力を発信するパワフルな展開となっている。記事の最後に、ページをめくると「ほら、もうおいしい匂いがしてきます」とあり、肉フェスの告知につなげているのも楽しくて良かった。表紙の見出し「おいしいは人がつくる。」も、特集の内容を的確に表しており、効果的だった。

【広報写真部門】

審査員：竹村 匠己 ((株) 京阪神エルマガジン社雑誌編集部 部長)

広報誌ということを前提に講評させていただきました。

その地域ならではの情景が伝わると良いと思いますが、広報誌という特性上地域の人が読むものという意識も加味させていただきました。

総じて、カメラの性能と、紙質、デザイナーさんの力にかなり左右されるという印象を受けました。

日々の業務の中で、制約はいろいろとあるでしょうが、その中でもやる気の強さが強いところが、結果響く写真となっているのではないかと感じました。

被写体との距離感なども含めて、その地域との関わり具合を感じ取れる写真が評価が高くなつたと思います。

あざとい感じ、あるいは、こんなもんだろうという遠慮があると、弱くなるなという印象です。

月並みな言い方で恐縮ですが、結局愛があるかどうか、みたいなところに帰結するのではないかと改めて感じました。

審査員：桂 知秋 (兵庫県メディアディレクター)

今回、写真の力を改めて感じるとともに、一瞬を切り取る写真だからこそ難しさも改めて噛み締めています。天候はもちろん、被写体のムード、背景にいる人の動き…。緻密な計画による撮影にしろ、偶然出会えたシーンにしろ、自治体として地域を切り取り、住民とコミュニケーションしようとする撮影者の姿勢があればあるほど、表現に昇華させることが難しいだろうと思います。

そんな中、1枚写真の特選に選ばれた洲本市の写真は、偶然の一瞬を見事に捉えた作品でした。歯の健康について考える特集のために撮影した、保育所で昼食後に歯を磨く園児のシーン。周りが遊んでいる中で懸命に歯を磨く被写体の表情に惹きつけられます。鏡越しの撮影、トリミングのバランスも見事ですが、撮影者の被写体への優しいまなざしがなければ実現できなかつたのではないかでしょうか。自分の暮らす街でこんな日常が今日もどこかで存在しているんだろうな 一 地域の方のそんな安心感につながる気がしました。

特選には選ばれなかつたものの、リハビリに取り組んできた二人の大切なワンシーンをあえて文字を配置せずに表現した加東市、就労支援施設の利用者がやつと好きなことによ会えたという刺繡作業に黙々と向かう姿を採用した芦屋市。一枚の写真で、人となりや、積み重ねてきた時間、関係性までもが映し出されており、なんでも「言語化」に頼りがちな昨今のムードを打ち破ってくれるような、写真だけができる表現を見事に実現していました。

広報はよい関係をつくること。

そのために一方的な上から目線の表現ではなく、対話する写真を。簡単ではないことを承知の上で、毎年の講評で同じようなことを言い続けていますが、年々そういった写真が増えているように感じています。ここからさらに一歩進むために、ぜひ意識していただきたいことがあります。まずは写真のアングル。被写体とまっすぐなのか、下から撮るのか、でメッセージが大きく変わります。また、写真に配置する文字表現も、写真とともに目に

入ってくるべきか、被写体のセリフなのか、作成者が言わせたいセリフなのか等、丁寧に思考することで写真がより活きます。

組み写真は、技術的なことに気を取られていることが多いように思えます。まずは組み写真にすることの意図、表現したいことを軸に据え、写真の選定や引き算も検討を。そして技術だけでなく、アイデアを広げることにもぜひ挑戦していただきたいと思っています。

(特選受賞作品)

○一枚写真の部：洲本市 「広報すもと 6月号」表紙

子どもならではの瞬間の表情を捉えていてとてもよい。

鏡越しのアングルにすることで自然な表情と、距離感が生まれていると思う。鏡に映り込んだ他の園児たちの様子との対比で本人が一人黙々と懸命に歯ブラシをしている姿がより際立たせられたことも見事。「歯の健康を考える」という少し硬い特集タイトルとのバランスも良い。

一瞬を切り取ることで、言語化できないものを表現する写真本来の力が十分に發揮できている一枚。

○組み写真の部：加東市 「広報かとう 8月号」表紙

プリントしたものを並べて撮ることで一体感が出ていて効果的。あえてプリントした写真を並べて撮影する手法は、戦争体験者への敬意と、戦争というテーマにまっすぐ向き合おうとする姿勢を感じる。机に並べられた写真もよく見ると、昔を語る現在の姿から昔の集合写真まで、時間が入り混じっているが、透明度をかけて少し存在を抑えたタイトルを真ん中に配置することで、軸を通しているところも見事。

【映像部門】

審査員：清水 理恵子（兵庫県広報専門員）

今やスマートフォンで気軽に8K撮影が出来、AIで自在に思い通りの画作りが出来る時代となりました。今年度の応募作品にもAIモデルが主役を務める物が登場するなど広報動画の分野にもその大きな波がやってきているのだなと言う事を改めて実感しました。見栄え良く仕上がり、手間も省けることで作業効率は良くなるかもしれません、そこに代えられない自治体広報としての大切な要素は何かを改めて考察し、受け手である視聴者との距離を縮める為の「人が手掛ける温度感」はこの激動の転換期にあっても忘れずに意識頂きたいと強く願います。

今回の私の審査ポイントは上記の思いを込めて今年も「映像から伝わる作り手の熱量とこだわり」に重点を置きました。まず、撮影者アッパレ！と賛辞を送りたいのが佐用町「いどうこんちゅうかん」です。全編を通して子どもが沢山登場するのですが、子どもの撮影ってプロでも本当に難しい。でも、登場するどの子も驚くほど自然体でした。昆虫に驚き・楽しみ・怖がる様子を、カメラを意識させる事なく収めていた上に、ラストに登場する大人まで子どもに返ったかのような無邪気さを感じられ、撮影者と被写体との心の距離の近さが伺えました。それが結果として作品の全体的な温かさを生んでいたのかなと思います。ただ、全体的に少し間延びした印象がありましたので、編集時に第三者的目線での思い切ったカット作業が行えたら、より見やすく仕上がるのではと思いました。

このポイントはどの作品にも言える事なのですが、特にドキュメンタリー調の作品では「思い切ったカット作業が出来るか」が仕上がりで大きな差となります。また“見る側”を離脱させない工夫として、会話の中に登場するキーワードのインサートを入れたり、出演者が話す言葉が形式的に終わらないよう、撮影前から雑談等で打ち解けて自然な表情や

言葉を引き出していくなど 準備の時間はとても重要になります。そのすべてがバランスよくまとめられていたのが西脇市「西脇チェック誕生～大好きなまちの新しいシンボル～」です。動画視聴後の播州織の美しさ・しなやかさの余韻が素晴らしいですし、このクリエイティビティが職員の方による自主制作によるものだと言う事が驚きでした。

自主制作での驚きでもう一つ。“静かな熱量”を感じたのが小野市「ONO city DRONE VISION」です。こちらも視聴後にエントリー用紙で自主制作と拝見し驚きました。小野市職員で構成された「小野市ドローン部隊」が地元への想いを込めた工夫で切り取る空からの視点は、この部隊だからこそだと感服致しました。贅沢を言うならドローン部隊のエピソードがエンディング等で垣間見られたら視聴者との距離がよりぐっと縮まるのではないかと感じました。

今回も皆様の想いのこもった作品を拝見させて頂き私自身も学び多い審査会となりました。是非、審査会をきっかけに各自治体の横のつながりを深めて頂き、兵庫県全体の動画広報のボトムアップに繋げて頂ければと思います。本当にお疲れ様でした。

審査員：山本 剛大（日本放送協会 神戸放送局 コンテンツセンター長）

地元の住民やほかの地域の人たちに伝えたいメッセージを盛り込んだ多彩な作品がそろっていて、とても興味深く拝見しました。映像を活用した自治体による広報は比較的新しい手法で、「こうすればうまくいく」という“法則”がまだ定まっていないのかもしれません。それだけに、新しい発想で自由に切り開いていく可能性も感じました。

審査にあたっては、「伝えたいことがしっかりと伝わってくるか」、つまり、「誰に対し」「どんな内容を」「どのように」伝えていくか、という点を軸に検討しました。難しい審査でしたが、上位の作品はあまり迷うことなく選べました。受賞作品の多くが自主制作だったことも特徴で、取り組まれた職員・スタッフの皆さまの熱意と高い技術を感じました。

特選の西脇市「西脇チェック誕生」は、物語が展開するように練られた構成をナレーションなしの美しい映像で綴っていて、自主制作と知って驚きました。小野市のドローン映像も、季節や天候、時間帯を選んで丁寧に撮影されていて、これも自主制作とは思いませんでした。あまりに爽快な仕上がりで、むしろ撮影した職員の皆さんのが登場し、「建設や災害対応のために習得したドローン技術を使って撮影に挑戦しました！」などと撮影風景も盛り込んだほうが手触り感があってよかったです。伝統文化に触れる方々の思いを見つめる南あわじ市や、戦後80年を機に戦争の記憶を刻もうと取り組む加東市の作品は、企画力、発想力が光っていました。インタビューを並べている部分があったので、例えば、作品制作の際、どんなことを工夫しているのか、実例のアップの映像を盛り込みながら具体的に掘り下げたり、長年大切に保管されてきたものをしっかりと接写し、シーン化して見せたりするとなおよかったです。芦屋市の特殊詐欺対策は多くの自治体が呼びかけるテーマですが、興味・関心を引きつけるための演出が秀逸で、対談を含め出演された皆さんの“伝えたい思い”があふれています。大勢の人を楽しく巻き込んだ多可町の町制20周年カウントダウンは地域の方々の地元愛が伝わってきますし、佐用町の「いどうこんちゅうかん」は子どもたちとの“近さ”が印象的で、生き生きとした表情からイベントの魅力が自然と感じ取れました。

伝える対象と内容、手法を吟味し、しっかりと構成を練る。その上でロケをして、現場で予想外のことがあればそれも盛り込んで改めて構成を練る。編集したら初めて見る人を含めて試写を繰り返し、修正する・・・こうした作業で作品の質は確実に高まると思います。その際、取材でお世話になった方に意識が向かがちですが、重視すべきはやはり作品を見る方々です。興味・関心を絶やさず見ることができるか、メッセージがしっかりと伝わるかを優先し、必要に応じて要素を落とすことも心がけていただければと思います。

住民に制度や取り組みを紹介したり、身近に起きた出来事を伝えたり、地域の魅力を外

に向けて発信したり・・・さまざまな活用法があると思います。こだわりの映像作品を通じて、それぞれの地域の活性化と“ファン”的獲得につなげていただければと願っています。

審査員：有田 佳浩（兵庫県広報プロデューサー）

何のための映像（動画）なのか。

そもそも論になりますが、広報の目的は「住民といい関係作る」ことにあります。広報映像も然り。決して役所が伝えたいことを伝えるためにあるものではない。いわば、映像は住民（視聴者）との対話の糸口なわけです。

それは、広報として意味のある映像（動画）なのか。

記録映像、報告動画、プロモーション企画の一口…そんな広報目的とは思えない映像が散見されました。今一度、広報映像とは、の原点に立ち返り取り組んでいただければと思います。

そんな中、西脇市の完成度はピカイチでした。プロセスを訴求しながら飽きさせない構成、視点の多様さ、言わされている感のないインタビューは、確実に地域のプライド醸成に繋がっています。

その他、印象に残ったのは小野市と多可町。小野市は一見単なるドローン映像に見えますが、職員自ら勉強、トレーニングをして撮影したのがミソ。できれば、そのバックストーリーを最後のクレジットに挿入して欲しかった。そうすれば、住民（視聴者）との新たな関係が生まれたと思います。

多可町は企画の勝利。一見素人が作るスライドショーのように感じるも、小さな町がみんなで周年を祝ったという一体感。さらに結局が高まりそうです。

どういう広報のための映像（動画）なのか。

改めて、その意味を問い合わせ直して、ぜひ取り組んでいってください。

(特選受賞作品)

○西脇市 「西脇チェック誕生～大好きなまちの新しいシンボル～」

極力説明を排除した完成度の高さ。動画のテンポ、登場する人物の自然体な表情や言葉、インサート映像の色どり、全てのバランスがとても良かった。ストーリー性がある構成で、ナレーションではなく画面の文字で伝えた点も効果的。映像が美しく、ピントの合わせ方・ぼかし方や、ドリー、パンの使い方、アングル・構図、背景などの撮影技術が高く、“キラッと光るカット”が盛り込まれていた。取り組みに関わった人たちの熱意と地域の人たちの期待感が自ずと伝わってきて、見終わったときに爽やかさ、すがすがしさが感じられる力作。